

(英語版)

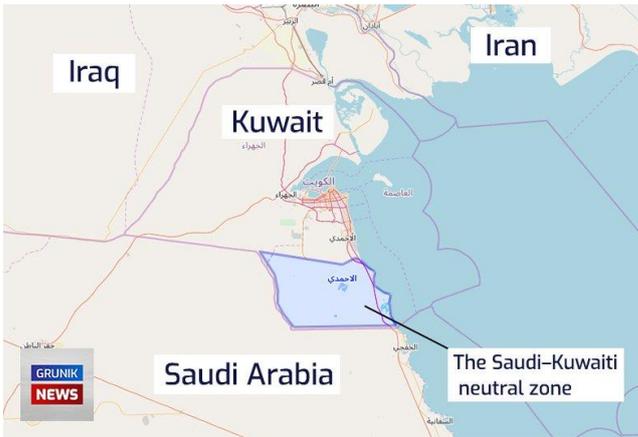
(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 ― 中東の戦後75年 (七十九)

第3章 アラーの恵み―石油ブームの到来 (十六)

七十九 富の分け前を求めて湾岸産油国に殺到する出稼ぎ(四―四)



その頃、クウェイトとサウジアラビアの中立地帯で石油の開発に乗り出した日本企業も人材が必要になり、数度にわたり募集広告を出した。1961年の最初の募集でアミン・シャティエーラが採用され、その後ザハラも1968年に採用された。二人はともにパレスチナ難民であったが、応募書類のアミンの国籍欄はパレスチナのままであり、ザハラはハラの国籍はヨルダンとなっていた。アミンの父親はパレスチナ人であることを誇りとし、いつか故郷のトルカルムに戻り教師を続けられる日の来ることを信じて国籍を変えなかった。一方ザハラ一家は数次の中東戦争を経て故郷の農地を取り戻すことはもはや不可能であると悟り、仕事を得るのに少しでも有利なようにと国籍をヨルダンに変更していた。彼らは以後パレスチナ系ヨルダン人と呼ばれることになる。

ヨルダン人のカティーブも転職組の一人であった。中東の石油会社は給料も良く、なによりも社会的な地位が高い。カティーブが故郷アンマンの両親に石油会社への転職を伝えると両親は手放しで喜んだ。ただ両親はその石油会社が名も無い日本企業であることに若干の違和感を抱いたが、第二次大戦後も欧米に踏みこじられたままのアラブの現状を思うと、廃墟から不死鳥のごとく蘇った日本に一抹の清涼感を覚えたのであった。

祖国パレスチナの復活を信じたパレスチナ人、ヨルダンに帰化して新しい人生を目指した。パレスチナ系ヨルダン人、そして将来の豊かな生活を夢見るヨルダン人――三人のアラブ人は運命に引きずられつつペルシヤ湾沿岸の小さな町で日本の石油会社の従業員として同じ職場で働くことになったのであった。

(続く)

荒葉 一也

E-mail: [Arehakazuya1@gmail.com](mailto:Arehakazuya1@gmail.com)